



辛いピッキングを抜け出してインバウンドへと“昇進”するチャンスは、ある日突然めぐってきた。しかも働きはじめてわずか2カ月という短期間で。しかし、アルバイト期間中で最大のチャンスは、無情にも掌から砂がこぼれ落ちるように逃げていった。

## 第4回

## 不運が重なり水泡に帰した“出世”

## 重労働から解放される!?

一月某日。

幸運は何の前触れもなくやってくる。

その日の朝しばらくの間、ホワイトボードに貼ってあるはずの自分の名前が見つからなかった。「ピッキング」の下が定位置のはずなのに、そこに私のネームプレートがない。

アルバイトは朝礼前、ホワイトボードに貼ってある自分の名前にチェックを入れる。その日の作業割り振りと出欠を確認するためだ。いつもアウトバウンド（出荷）のところにある私の名前は、インバウンド（入荷）のところにあった。私を含めて八人の名前が囲んであり「十一時からトレーニング」とあった。朝礼後に聞きに行けば、「十一時までは通常通りピッキングをして、もう一度朝礼の場所に集合するように」とのことだった。

十一時に行くと、荷主の社員が二人待っていた。男女四人ずつのアルバイトを二組に分けて、荷主の社員が言った。

「これから三週間ずつ、レシービングとストーリーングのトレーニングを行います」

それを聞いて、胸がドキドキした。

以前に、センター内には荷主の社員をトップとする身分制度があることを話した。身分はさらに細分化され、アルバイトにも存在する。アルバイトの場合、担当する作業によって身分の上下が決まる。序列のトップにくるのはレシービング（荷受け・検品）とストーリーング（梱入れ）である。次に梱包・出荷。そ

の下に最も重労働であるピッキングがきて、アルバイト見習いはピッキングからスタートする。ピッキングは、アルバイト見習いの根性だめしのような意味合いもある。ここで音を上げるようでは、次に進む権利を手に入れることができない。

アルバイト見習いからレシービングやストーリーングまでにたどりつくには一年はかかるだろう、と私は思っていた。長い道のりである、と。そのチャンスが、わずか二カ月でめぐってきた。作業序列からいえば一気に三段跳びの“出世”である。

時給はいずれも八五〇円で変わりが無い。しかしインバウンドが格上であることは、アウトバウンドの作業は物流業者の社員が説明するに對して、インバウンドは荷主社員が説明することからもわかる。

アルバイトにとつて、インバウンドの作業が“出世”と見なされるのは、作業がだんぜん楽だからだ。レシービングはコンピュータの前に立ったままの作業だし、ストーリーングは専用端末を手にして一〇〇個の商品を空きスペースを見つけて梱入れするだけでいい。ピッキング同様にノルマはあるものの、広いセンターを歩きまわって商品を探すのと比べると作業量や緊張感において天と地ほどの開きがある。同じ時給なら、楽な仕事を割り当てられた方が、お得なのだ。

しかし私がドキドキした一番の理由は、仕事に楽になるからではなかった。インバウンドの作業につくことができれば、この物流セ

センターの業務の中核に少しでも近づけることができると新たな発見につながると考えたからだ。  
**パスワードを忘れてしまった**

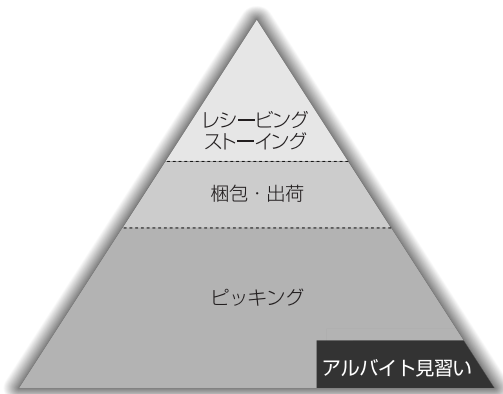
しかし、そうは問屋がおろさないのである。荷主の男性社員について二階に上がった。

「ハンド端末を立ち上げて、みなさんのパスワードを入力して下さい」

パスワード……

この言葉を聞いたとたん、期待感が急に止んでいくのを感じた。掌にいやな汗がにじんできた。ポケットの財布の中からもパスワードは見つからないし、ロッカーに戻ってバックパックをひっくり返してもでてこなかった。ここでは全ての作業の前に各自がログインをして記録に残すのだ、と何度か説明した。ピッキングのときは、パスワードと一緒に渡されたバーコードをスキャンするだけで、パスワードを入力したことになっていた。ほとんど

アルバイト作業の階級制



のアルバイトはバーコードを使っていた。

たしかに、パスワードを手渡されたとき、勤務中は常に携帯するようにいわれたのだが、同時に、うっかりなくしてだれかが悪用して商品が盗まれた場合は、なくした本人が全責任を負うという恐ろしい注意書きがついてきた。

センター内にある五〇万点の在庫の責任をとらされたのではかなわない、と私は思った。バーコードが悪用されることもあるのだろうか、これは毎日必要なだから持っていかなければならない。しかし、当分使う当てのないと思っていたパスワードは、用心深く自宅の机の奥深くにしまっておいたのだ。

そう考えたのは、私一人ではなかった。この日、突然のご指名をたまわった八人のうち四人がパスワードを持っていなかったのだから。

「困りましたね。物流業者の担当者の方に聞いてみてください」  
と荷主の社員は言う。

それにしても、荷主と物流業者の間は、どれほど意思の疎通がはかれているのだろう。トレーニングを受ける八人のうち三人までが、一月いっぱい辞めるので、六週間のトレーニングは受けることができない、という。しかも、すでにその旨は報告済みだというのだ。

私は一〇分以上かかって一階でフォークリフトに乗っているインバウンドの担当者を見つけた。

「パスワードを持ってないと、どうしようもないね」

と一言。そのさげすむような顔には「はい残念でした。チャンスは一回でお願いします。パスワードを持ってこなかったあなたが悪い」と書いてあるようだった。その一言で、またピッキングに逆戻り。まさに天国から地獄である。

このアルバイト期間中で、最悪の失敗。アルバイト中で最大のチャンスを逃した気がした。そして、二度と「出世」のチャンスが回ってこないような気がした。

### 曖昧な選定基準

悔しくて、その日はピッキングどころではなかった。ここでの取材は、待ちの姿勢を強いられるので、何か起こったときにものにならないのでは、悔やんでも悔やみきれない。

呆然としたままでピッキングをしながら、いろいろな考えが浮かんで消えていった。

考えは、だれがどんな基準でアルバイトの「出世」を決めるのだろうという点を中心にぐるぐると回りつづけた。ピッキングのスピードか正確さか。勤務期間の長短か、勤務態度か。それとも残業時間の多寡か。どれ一つとっても、私以外のアルバイトより優れているようには思えないのだが。

それなら履歴書に書いた「大卒」という學歷が物を言ったのか。中卒や高卒では、コンピューターの操作は任せられないというのだろうか。たぶん、それも違っているだろうな。

人選しているのは物流業者で、おそらく、その理由は偶然というのが、正解に近そうだ。ピ

ツキングのスピードや正確さも多少は考慮されるだろうが、それ以上に、トレーニンングを行う日にたまたま出勤していた中から選んだのだろう。

もし確固たる基準があるのなら、事前にトレーニンングを行うことを伝えられるはずだし、パスワードを忘れたとしても、「次回のトレーニンングのときには必ず持ってきてください」という話になるはずだから。

ここでは、アルバイトが関心を持っていることには、ほとんど説明がない。情報量が少ない分、アルバイトは疑心暗鬼になり、ある者はどうすれば気に入られるのかと卑屈なくらい従順になり、またある者はバカらしくてやつてられない、と辞めていく。

アルバイトの操縦方法の一つとして、秘密主義が幅を利かせていることはたしかなようだ。

そういえば、この物流業者の先代の〇×社長が二期八年トップに君臨する間、社内に秘密主義を徹底させたといわれていたのを思いだした。社内では、第一線を退いたのちも畏怖と侮蔑を込めて「秘密主義の〇×さん」と呼ばれていた。

私の記者時代は、〇×社長時代とびたりと一致する。そして私は数年間、この業者を担当して毎週のように取材を申し込んでいた。しかし、現場を見せてもらった記憶はほとんどない。本社の広報室で、担当者のお話を拝聴できればいい方だった。

〇×元社長に発した秘密主義の体質が、数

年かかって末端の物流センターにまで浸透したというのだろうか。日本中にある、この業者の物流センターが、同じような秘密主義で運営されているのだろうか。そこで働くアルバイト同志たちに思いを馳せた。

予感したとおり、アルバイトをつづけた約半年の間、インバウンドのトレーニンングを受ける機会は二度と回ってこなかった。

## 人生初の無断欠勤

一月下旬の日曜日のこと。

この日は朝から漠然とした違和感を感じていた。その原因は朝の出勤簿だった。

前日の土曜は休んで、日曜に出勤してきたのだが、出勤簿には休んだ日についてははずの〈欠〉のマークが抜けていた。おかげで、土曜日の欄に印鑑を押したあとで間違いに気づき、もう一度日曜に押し直した。

働きはじめて二カ月の間、土日は家人が子どもの面倒を見てくれるので、これまで一日も休まずに出勤していた。しかし、二日前の金曜の夜、数年ぶりに高校時代の友人たちと集まることになっていたので夜遅くまで飲むことになると思い、翌日の土曜を休むことにしたのだった。

出勤簿のことは何かの手違いだろうと思いついて、いつものように朝礼に向かった。朝礼前に、昨年と同じ時期に働きはじめた山本君を見つけて言葉を交わす。都内の大学四年生で、四月からブライダル関係の会社に就職が決まっているという。就職難の時代にたい

したものだ。

どうしてここでバイトをしているのか、と尋ねると

「卒業試験が終わったら、二週間ほどイタリア旅行に行くんです。旅行代金の七万円は払ったんですけど、おみやげ代とかを稼ぎたくって」

オフ・シーズンとはいえ、二週間で七万円とは安すぎないか。しかも飛行機代に加えて朝食つきの宿代まで込みの金額だという。

「大手の代理店なので大丈夫ですよ」と屈託のない若者なのだ。

朝礼が終わると、山本君と一緒に二階のピッキングエリアへと向かった。いつも通りのスケジュールをこなしながらも、出勤簿のことが引つかかっていた。帰り際に、アルバイトの出勤スケジュールを見て、はじめて事態が飲みこめた。

前日の土曜、私は無断欠勤したことになっていたのだった！

アルバイトは金曜日に翌週のスケジュールを口頭で告げるようになっていた。これまで私は、このスケジュールが翌日の土曜から金曜日までのスケジュールのことだと勘違いしていた。だから二日前の金曜に、「土曜は休みたい」と伝えたとき、翌日の土曜を休むつもりだったのだ。

しかし、金曜日に伝えるスケジュールは日曜から土曜までのものだった。つまり、私が休みたいと申告した土曜は、一週間後の土曜だったのだ。かくして、私は無断欠勤となっ

た。だから、いつも休みの日に押しあつた  
〈欠〉のマークが抜けていたのだ。

何と不名誉なことであろう。生まれてはじめての無断欠勤である。サラリーマン時代はもちろん、学生時代のアルバイトを振り返っても無断欠勤は思い当たらない。胃の腑から苦酸<sup>にがす</sup>っぱいムカムカした気持ちで口元まで上つてきた。とにかく、その日は事務所に立ちよる気になれず、逃げるようにしてバスに乗り駅へと向かった。

## 物流業者の怠慢

「二カ月も働いて、スケジュールのこともわかってなかったのか」

と不信に思う向きもあるだろう。

たしかに、スケジュールを把握してなかったのは私に非がある。がしかし、先に話したとおり、ここはまともに説明が行われることがきわめて少ない職場なのである。基本的と思えるような事柄でも、説明をはしよつたまま進んでいくのだ。

自分で言うのもなんだが、人並み程度には目端の利く方だと思つている。状況判断能力のテストがあるなら、平均点を超える自信はある。しかし、ここで働いていると自分がひどく愚か者になつたような気がしてくる。それは、ここを仕切つている物流業者の管理能力の低さに起因しているように思えてならない。

十一月に働きはじめたのが土曜だった。よく日曜に出勤すると、その週が全て休みになつていた。事務所では聞けば、

「うちは金曜にスケジュールを申告することになつていんです。聞いてませんでした？」

き・い・て・い・な・い！

説明の省略はスケジュールに限つたことではない。

「無断欠勤」から一カ月ほど経つたある日のこと。朝、事務所の前に人だかりができていた。その視線をたどると、物流業者の健保組合持ちで健康診断が受けられるという張り紙があつた。その横には、五〇人ほどの名簿があつた。

二〇〇人ほどいるアルバイトの中の五〇人である。もちろん、私の名前もない。張り紙の前で女性陣が顔を見合わせている。

「これは一日だけなのかしら」

「みんな受けられるわけじゃないみたいね」

「どんな基準で選んでいるのかしら」

いずれもつともな質問である。しかし、その答えはどこにも書いてない。

あとで聞いた事情通たちの話を総合すると、一年以上働いて、一定の勤務時間を超えた人たちが対象なのだそう。つまり、一種のインセンティブである。それならそうとほんの一言書くだけで足りるのに、なんとも思わせぶりなやり方である。

一事が万事この調子である。お気楽というか、手抜きというのか。「無断欠勤」の件も、一度でもきちんと言明を受けていたのなら、素直に非を認める気になつただろう。しかし、物流企業の管理とも呼べないようなお粗末なやり方の下で働いていると、

「あなたたちに、四の五の言われたくないよ」と憎まれ口の一つでもたたきたくなる。

ここでの管理の基本は、「聞けば教えてあげるよ」という受け身一辺倒の態度であり、わからないことを聞くのはアルバイトの責任であり、聞かずに何かを間違えればそれはアルバイトの減点につながる。そもその前提となる最初の説明が省略されているにもかかわらずである。

つまり、いい加減のつけはアルバイトに回つてくるのである。こんなやり方では、アルバイトはやる気をなくす一方であり、センターの生産性が下がることはあつても、上がることはまずない。

「無断欠勤」によるむかつきは、翌朝まで持ち越した。送迎バスを降りて、事務所に入ると例のEQの低い〈ウド課長〉と目があつた。一番会いたくない相手だが仕方がない。スケジュールを誤解していたことを話すと、得意の不機嫌な声で、

「ちゃんとやって下さい。みんなやっていることです。こんなことがつづくようでは困りますよ」

と説教を垂れる。

私は山ほどある言いたいことを全部飲み込んで、

「わかりました」

と一言。

事務所をでるとき、ムカムカした気分が吐き気になつていた。

(文中はいずれも仮名)